

# 黑潮三郎

久保 喬・作／久米宏一・画



# 黒潮三郎

久保  
喬

黒潮三郎

現代・創作児童文学 9

1976年 2月／発行

著者／久保 喬 1976©

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島 1丁目 4-3  
電話／東京03-861-1506 (代表)  
振替／東京0-64678

印刷／三浦企画印刷  
製本／東京美術紙工

乱丁落丁本はおとりかえ致しますので、お求めの書店または本社へお申し出願います。

913 久保 喬

黒潮三郎

金の星社 1976

205 P 22cm (現代・創作児童文学 9)

基本カード記載例

8393-042091-1406

現代・創作児童文学 9

# 黒潮三郎

久保 喬







1+12 12.12 KOME





黒潮の海

新しい夜明けの海

きょうも

少年三郎を呼んでいる

波がざわざわ舟のまわりでさわぎだした。

黒い雲が海の上にかぶさるようにひろがってくる。

「時化<sup>しけ</sup>になるぞ、はやく引きあげないとあぶない。」

サブはつぶやきながら、舟底<sup>ふなぞこ</sup>へ目をむけたが、カゴの中には、まだろくなえものもない。

朝の浜<sup>はま</sup>で、女童<sup>めなうべ</sup>のカヤに、「待つてろよ、今日の漁<sup>りよう</sup>はでかいぞお。」と、どなって、舟をこぎ出してきた。

磯岩<sup>いそいわ</sup>のはしに立って見送るカヤも目をきらきらさせていたが、そうだ、今日はどうしても魚を舟底<sup>ふなぞこ</sup>いっぱいとりたい、食えるものならなんでもほしい、とサブは思った。

「ちかいうちに、また島じゆうが、こんきゆう地獄<sup>じごく</sup>になりそうじゃ。」

と、浜<sup>はま</sup>の年寄<sup>よ</sup>りたちはいつている。

こんきゆうというのは、八丈の島ことばで飢饉<sup>ききん</sup>のこと。去年の夏はひでりつづきで、秋には台風。そのために島じゆうの作物のみに<sup>まった</sup>りが全くなかった。

それだけでなく、ふだんから八丈では、ブジキ（食料）がとぼしく、麦やアワに野草をまぜた雑炊が常食の暮らしだ。どの家も土蔵や壺にわずかのたくわえがあるきりで、村じゅうが、あと半年もちこたえていくこともむずかしい。

ことにサブの家などは、畑はなくて、六十近い漁師のおじいとふたり暮らし。漁のしごと、冬の沖は西風が荒れて、舟の出せない日が多かった。その間は、浜でハンバ（海草）や貝をひろい、山で野草をとってきたり、作っていたわずかのヒモノを、近所の家でアワに代えてもらった。りして食いつないだ。そのうちに、浜の林のツバキのつぼみも赤くなり、漁のやれる季節がきた。

ところが、おじいとふたりで、沖へ舟を出した日、はやて（疾風）に会って、あぶなく波にのまれかけて、やっと浜へもどったが、そのとき腰をうった痛みで、おじいは寝たきりでいる。「よし、おれひとりできつてくる。」

と、十二歳になったばかりのサブが、ひとりで漁へ出かけようとすると、おじいが窓から空を見て、

「今日はやめる。雲があやしい。浜でハンバ（海草）でもひろえ。」  
と、いう。

「うん。」

と、サブはこたえたが、こっそり、サオとエサを入れたカゴをさげて家を出た。

（食い物があるだけじゃあない、おかあにもはやく菓をやりたい。）

おじいにはいわないが、サブはおかあのことにも気になっている。

おかあは、村の南のはずれの山かげにある、八丈絹の機織り場で働いている。

「サブよ、おまえはおかあに会いにいったらならんぞ。おかあとおまえはもう他人じゃぞ。」

と、おじいはいう。

だが、サブは二、三日前も、そっと、ひとりでおかあに会いにいった。

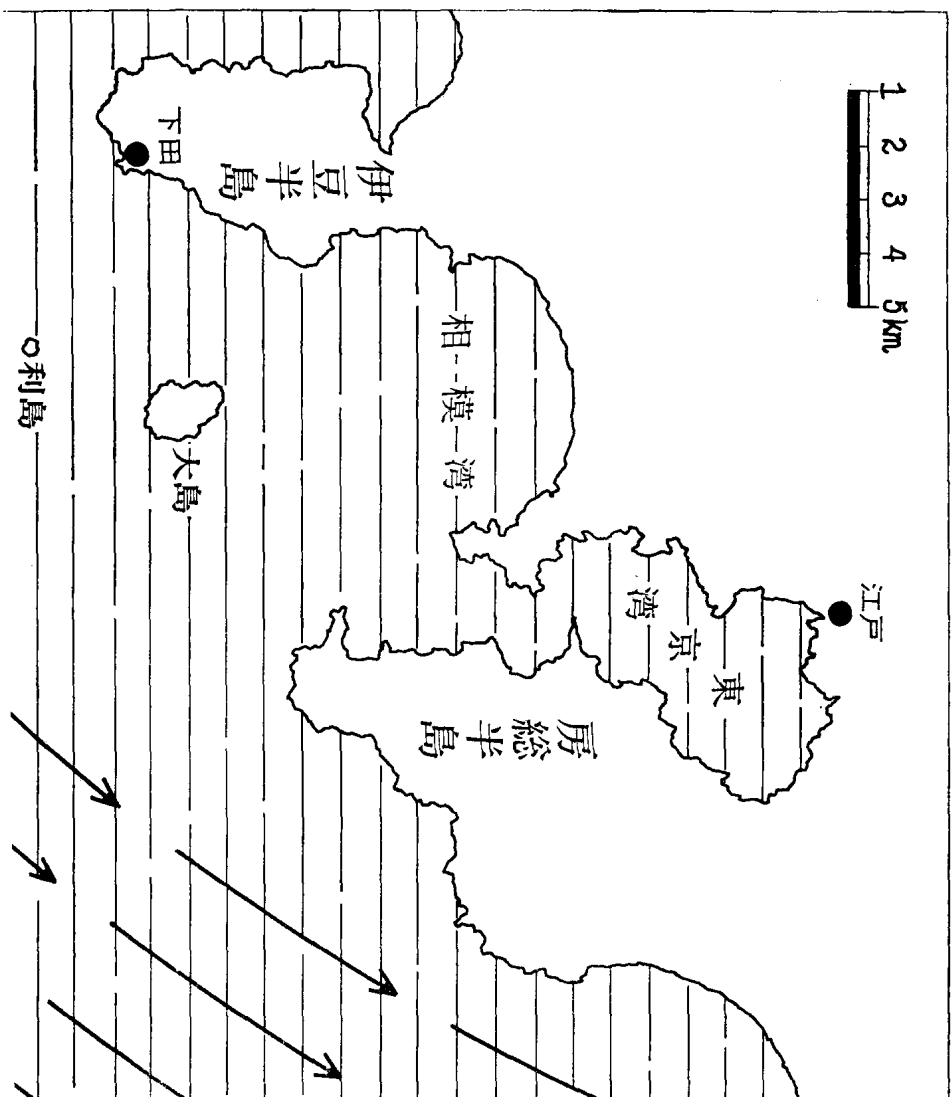
機織り場は、赤いツバキの花が咲きはじめている林のおくに、十棟ほどの織屋が建ちならんでいて、家いへの窓の中では、幾十人もの女たちが、手織り機に腰をかけて、八丈絹を織っている。カチャリ、カチャリという音と、機織り歌が、窓の外へ流れてくる。

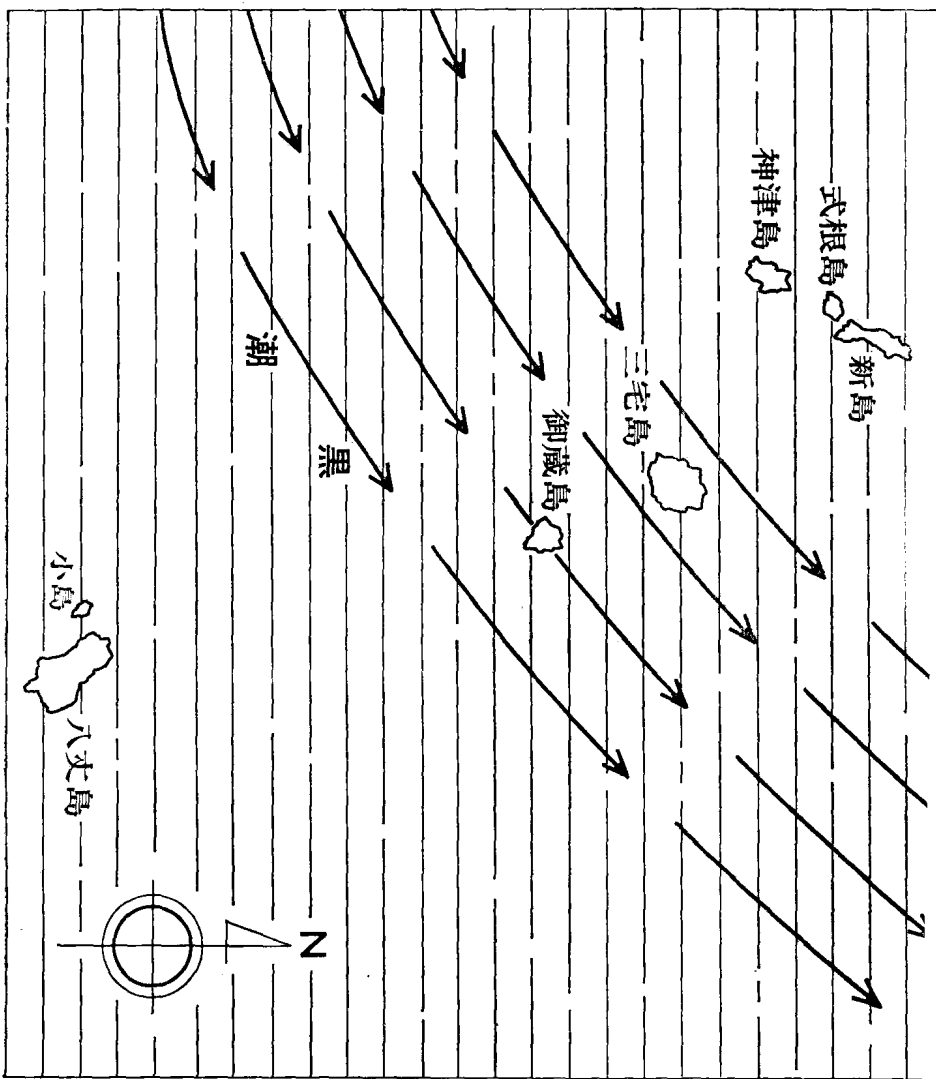
沖で見たときや鬼島と見たが

きて見りや八丈は情島

本土から遠くはなれたこの島で織られている八丈絹は、遠い昔、関東の大名北条氏が島を支配していたころから、貢ぎ物として毎年取りたてられていたが、徳川幕府の時代になっても、そう

# 伊豆諸島地図





いう年貢制度はつづいている。

このころの江戸城内の女はもとより、江戸じゅうの町の女たちも、はるばる八丈の島からくるこの織物のあでやかな美しさに心ひかれていて、

花のからだに八丈絹を

着てみたやな、一度でも

と、いうわらべ歌もはやっていた。

黄色と樺色と黒の三色の草木染めは、絹地の光とつけ合った、あやしい派手な色どりの織物。

毎年春に一度、幕府御用の帆船二そうが、年貢の絹を船いっばいに積みこんで江戸へ出ていく。

そのだいに年貢をあつかう地役人は、いつも織屋を見まわって、織女たちが織る絹の出来ぐあいなどをきびしくしらべている。サブのおかあのトヨも、やはりそこで働かされているのだった。「おぬしのおかあは、このごろからだかわるいのに、休まずに仕事をつづけているそうな。」

そういううわさを、女童のカヤから聞いたので、サブは気がかりになって、そっと、織屋のそばまできてみたのだった。

窓<sup>まど</sup>の外から声をかけて、ほかの織女<sup>おりこ</sup>の人にたのむと、部屋<sup>へや</sup>のおくから、おかあがおどろいた顔で出てきて、ひくい声で、

「なにしにきた、ここは、おぬしきてはならんというてあるに。」

「うん——。」

と、サブは口ごもった。

白いおかあの顔が、日暮<sup>ぐ</sup>れの光の中で、青くすきとおっている。病氣<sup>びん</sup>のためか、朝から晩まで休みなしで機<sup>はた</sup>ばかり織っているせいだろうか。

「からだのかげんはどうじゃ、おかあ。」

「心配いらん。それよりも、おぬし、お役人に見られたらおとがめをうけるよ。さ、はよう帰りやれ。」

母にせきたてられて、サブは、しかたなく窓からはなれた。

何か心残りがして、歩いていくあいだにも、すぐ後ろの織屋では、カチャリ、カチャリと機の音が、たえまなくひびいていた。

幕府<sup>ばふ</sup>へおさめる八丈絹は、何かにつけてきびしいとりあつかいをされていた。それで、織屋に

出入りする者もみな、素姓すじやうのたしかな者だけがえらばれる。

たとえば、島には、罪人ざいにんで江戸から送られてきている流人るにんの人たちもいるが、その人びとは織屋のあたりへ近づくこともゆるされない。

サブのおかあは、織女おりことしては、ほかのどの女たちもおよばぬくらいの仕事をするが、流人の男と夫婦みょうとになって、サブを生んでからのちは、長いあいだ上納じやうのうの品を織ることはなかった。

サブのおとうは、サブが生まれて間もなく病死して、サブはおじいとおかあといっしょに暮らしていた。

ところが、去年の文化二年（一八〇五年）幕府ばくふから島の役所へ年貢ねんぐの高を増ますという達しがあつて、今までは五百反たんの割当わりあてだったが、それよりもさらに百反余り多くの量を上納しなければならなくなった。

「それはむりじゃ、とてもそげに織れはせん。」

と、織女おりこたちも男たちも、村じゅうの者がおどろいて、島役人へ、納入高をゆるめてほしいと嘆願たんがんした。だが、島役人の伊那木伝蔵いなぎでんぞうは、

「いや、お上かみへ訴うえても聞きとどけてはもらえぬぞ。みなの方が、もうひとつ精を出して働くのじゃな。」